

岩手医科大学歯学会第34回例会抄録

日時：平成4年6月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階第2講義室

演題1. 我国における舌癌剖検症例の検討

— 日本病理剖検輯報による1989年の集計 —

○佐藤 方信, 佐藤 泰生, 佐島三重子,
畠山 節子

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

わが国における舌癌症例の実態の解明を目的に剖検輯報第32輯から収集した1989年度に剖検された舌の悪性新生物症例について種々の観点から集計し、その結果を報告した。

1989年度にわが国において剖検された舌の悪性新生物症例数は100例（男68, 女32）であり、同年度の舌の悪性新生物による死亡数（人口動態統計）に対する剖検率は15.5%であった。死亡年代別では、70歳代が26例で最も多く、次は50歳代と60歳代で各々20例であった。これらの症例の平均死亡年齢は62.4歳であった。組織像別では扁平上皮癌が87例（92.6%）で、組織学的分化度別には高分化型が最も多かった。その発生部位では舌（側）縁部が7例で最も多く、ついで舌根（後）部が3例で、左右別には男性では左右同数で、女性では右側が多かった。リンパ節転移では頸部リンパ節（34例）が最も多くの症例で転移があり、ついで肺・肺門（19例）、喉頭・食道・気管周囲（14例）、鎖骨（11例）、縦隔・静脈角（10例）などに多く、臓器転移では肺・気管・気管支（51例）、ついで骨・骨髄・椎骨（20例）、肝・肝内胆管（19例）、肋膜・胸壁（19例）、甲状腺（19例）、皮膚・皮下組織（18例）、心臓（17例）、胃臓（16例）などが転移の頻度の高い臓器であった。舌の悪性新生物に他臓器の癌を合併した多重癌症例数が26例認められたが、単一癌症例の61.5歳に比較して、多重癌症では64.8歳と死亡年齢が高くなっていた。重複臓器別には二重癌では胃との重複が6例で最も多く、肺との重複が4例、食道、大腸、甲状腺、前立腺との重複が各々2例となっており、三重癌では胃と食道、胃と急性骨髄性白血病、肺と皮膚と重複した症例が各々1例であった。死因となった副病変で最も多かったのは肺の感染症で、肺のうっ血水

腫や出血、敗血症や全身性真菌感染、舌縫合部や局所再発による出血およびDIC、癌性浸潤による頸動脈破裂などが注目された。

演題2. 歯根穿孔,あるいは歯根破折に伴って歯肉に腫脹を生じた症例について

○白戸 裕, 松丸健三郎, 菅原 教修,
熊谷 敦史

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

主訴が歯肉の腫脹例で、歯根穿孔に伴う病変3例（24～57歳の女性）と歯の破折に伴う病変1例（63歳の女性）を報告する。2例は、小臼歯に金属鑄造体および歯冠補綴物装着後に、1例は側切歯に築造体用窩洞形成中に穿孔し同部を根管内からアマルガムにて封鎖し金属鑄造体および歯冠補綴物装着後に、1例は脱離した金属鑄造体・歯冠補綴物を再装着後に、頬側歯肉に腫脹を生じ来院した。主訴部の診査で歯周ポケットが2例に、またX線診査で3例では金属様突出部に一致する歯根面にX線透過像が、1例は主訴部の近心側で根管内の金属様不透過像に関係なく歯冠側 $\frac{1}{2}$ から $\frac{2}{3}$ にかけてX線透過像が認められた。症例4は、消炎後も咬合痛が残存していたが、鑄造冠が5カ月後に脱離し咬合痛も消失した。この際に肉眼的にもX線のにも歯の破折が確認された。フラップ手術時に症例1, 2, 3は突出部を削除し、症例1はLyodura®を、症例3はハイドロオキシアパタイトを、症例4は築造体装着後に同様にしてハイドロオキシアパタイトを填塞した。術後5カ月～9年にわたり経過観察を行なった。症例4は、術後9カ月で築造体を除去しメタル・キャップに作り直したが、脱離を繰り返すために、補綴の理由で抜歯された。症例1, 症例3は、経過観察期間中、臨床的に填塞材料による所見の差は、特に認められず、またX線診査で穿孔部周囲のX線透過性が減少する傾向が認められた。穿孔歯や破折歯の処置に際し、フラップ手術を使用する方法は、病変部の位置、欠損の大きさ、などが明視野で

確認でき、病変の除去やその後の欠損部への材料の充填が容易に出来る利点がある。破折歯には、今回行なわなかったが、露出歯質を完全に被覆する型の築造体の製作が破折の拡大防止や歯周組織の安静に有効ではないかと思われる。既存の歯周病変と穿孔部や破折部の病変とが合併している場合には、同部より歯冠側では、歯周組織の再生が難しいと思われた。

演題3. 色素を応用した象牙質透過性に関する研究 — 仮封材の象牙質透過性に及ぼす影響 —

○手塚 永均, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

目的：色素を用いた分光分析法による象牙質透過性試験法を考案し、この方法を用いて仮封材に接触した象牙質面の透過性について検討した。

実験材料および方法：実験には、屠殺直後抜去した3～4歳の日本短角種、牛下顎左右側中切歯I1を一組として200本の歯牙を使用した。

実験材料には、ユージノール系のプロパック（GC社製）、ユージグイン（昭和薬品化工社製）、非ユージ

ノール系のフリージノールテンポラリーバック（GC社製）、ノージノール（COE社製）ならびにHY剤を含んだハイボンドテンポラリーセメントハード（松風社製）の5種類の仮封材を用いた。

試料は、歯冠部唇面の象牙質面を#600の耐水研磨紙を用い、手圧下にて10往復させたものを被検象牙質面として、仮封材を被覆したものと、なにもしないコントロール群を作製し一つの仮封材につき20本の試料を作製した。次いで、37℃水中に24時間および1週間保管した後、探針にて仮封材を除去し、色素の浸透表面積を規定し、2%メチレンブルーに24h浸漬させた。浸漬後、規定した部分を切出し10%硝酸に48h溶解させ、溶解した溶液の吸光度を分光光度計にて測定し、象牙質の透過性を評価した。

実験結果ならびに考察：1. 仮封材に接した象牙質面の透過性は減少していた。2. 仮封材の接触時間は、象牙質透過性に影響し、接触時間が長くなると減少する傾向を示した。3. コントロール群の24時間と1週間水中保管において色素浸透性に差がなかった事から、仮封材自身が象牙質透過性に影響を及ぼしている事が推測される。4. なお、本法は、象牙質の透過性を定量的に判定するものとして有用な方法である。